

ハンガリー動乱50年:動乱を招いた暗黒時代(その6) —ÁVH粛清の始まり

盛田 常夫

ユダヤ人虐殺の犯罪人を追っているサイモン・ヴィーゼンタール・センターが、「ラストミニユッツ」のアクションとして、オーストラリア在住のゼンタイ・カーロイ86歳を告発し、ハンガリー政府に引き渡し交渉を要求した。ハンガリー政府はこの要請にしたがい、オーストラリア政府と外交交渉を重ね、この夏、オーストラリアの裁判所はハンガリーへの引き渡しを認める判決を下した。実際に引き渡しが行われるかどうかは、さらに上級審の判断を待たなくてはならないが、一つの判断は下された。

告発状によれば、ゼンタイはハンガリーのファシスト党である矢十字党の党员として、1944年11月、ユダヤ人を識別する星十字を胸に付けていなかった18歳のバラージュ・ピーテルに暴行を加え、縛ったままでドナウ河に投げ捨てた殺人容疑がかけられている。すでに60年以上も経過した事件である。

ハンガリーではソ連軍による解放で終戦を迎えるまでのわずか1年の間に、多くのユダヤ人が強制収容所送りになるか、虐殺された。戦後、ハンガリーにおけるファシズム運動を主導した矢十字党の党员たちは犯罪追求を恐れて、大挙して国外へ逃れた。ゼンタイもその1人だと考えられている。

しかし、戦後の共産党政治警察による合法的な殺人や非合法的な虐殺の責任が追及されず、矢十字党の責任だけが永遠に追求されるのは、片手落ちのように思われる。ユダヤ人への犯罪だけは永遠に免責されないというのは、奇妙な論理と言わざるをえない。

ユダヤ人と共産党

戦後の中・東欧の共産党にはユダヤ人青年が大量に加入した。ユダヤ人虐殺の恐怖と仕返し
の意図から、権力者として自らの存在を主張し

ようとして、多くのユダヤ人の若者が共産党に加わった。ハンガリーでも共産党の指導部だけでなく、秘密警察であるÁVHにも多くのユダヤ人の若者が加わった。なかでも、バウエル・ミクローシュとシェーンボルグ・ユーディット夫妻（バウエル・タマーシュの両親）、ユーディットの兄であるセンディ・ジョルジュは、有能な取調官として、ÁVHでも一目置かれる存在だった。

バウエル・ミクローシュとセンディ・ジョルジュはその語学の才能を買われ、東欧共産党の粛清劇の始まりとなったノエル・フィールドの尋問に加わり、さらにライク・ラーズローの取り調べにも加わった。さらに、社会民主党幹部の粛清においても、センディ・ジョルジュはサカシッチ最高幹部会議議長の、バウエル・ミクローシュはリース・イシュトヴァーン法務大臣の担当取調官に抜擢された。まさに、バウエル一家は中・東欧共産党粛清の重要事件すべてにかかわっている。

リース・イシュトヴァーンが取り調べにおいて急死したことは前号で記した。この虐殺にかんして、2000年前後の国会で野党の小地主党などが調査を要求し、SZDSZ議員バウエル・タマーシュが反論する一幕があり、いわゆる政治警察の過去をもつ父と息子の関係が、ハンガリーの政治家や芸術家の間で一つのテーマになった。

リース法務大臣の拷問殺人の後、ÁVHでは信じがたい事件が仕組まれていく。それはソ連におけるスターリンによる粛清劇のハンガリー版そのものであった。

スーチ兄弟の逮捕

サカシッチ逮捕、リース法務大臣急死から間もない10月、保安警察副長官スーチ・エルヌーとその弟スーチ・ミクローシュが逮捕された。

それまでスパイを摘発する側であったÁVH副長官が、「トロツキー主義者であり、アメリカのスパイである」と決めつけられ、逮捕されたのである。この逮捕を主導したのは、ソ連の顧問団とラーコシである。

言うまでもなく、スーチ・エルヌーはÁVH長官ピーテル・ガーボルの片腕として、ノエル・フィールドにかかわるグループの摘発の先頭に立ち、その後のライク逮捕に始まるスパイ摘発の陣頭指揮をとってきた男である。そのスーチが、今度は逆に「アメリカのスパイ」と決めつけられた。

スーチはマニャックに政治的指導者の過去の経歴を洗っていたことで知られていた。その調査はラーコシやレーヴァイにまで及んでいたと言われる。いわばすべてを知る男であった。夫人はロシア人で、ソ連の支援を受ける立場にあった。そのような強力な地位を持つ男が、今度は「スパイ」摘発の罠に嵌った。

ただ、彼には一つだけ弱点があった。それは弟のミクローシュが大戦中に英国に亡命し、英国の諜報機関のエージェントになっていたことだ。その事実だけを口実に、スーチ兄弟は保安警察内に勢力を広げ、西側スパイ網を作り上げたというシナリオが描かれた。

スーチ兄弟の逮捕によって、ÁVH内は凍り付いたと言われる。もちろん、スーチに近い職員も逮捕された。副長官やその周辺の人物が逮捕されるなら、ÁVHの職員の誰もがその対象になる可能性があるからである。スーチ逮捕によって、ハンガリーの政治警察は大きな転機を迎えることになった。

スーチ兄弟虐殺

逮捕されたスーチ兄弟の尋問は進まなかった。取調官に犯罪追求の自信も証拠もなかっただけでなく、誰もが容疑を信じられなかったからである。他方、スーチ兄弟も自信満々に受け答えし、容疑を裏付けることができなかった。それを知ったラーコシは、ピーテル・ガーボルにた

いして、スーチの自己批判書をとるように指示した。

スーチはこの要請に応じて、詳細な報告を書いた。その内容は公開されていないが、それまでのラーコシと政治警察が仕組んだ奸計の一部始終が記されていたようだ。ラーコシはこの報告を受け取った後、ピーテル・ガーボルに拷問の指示を出したのである。

拷問を実行したのはÁVH内の拷問担当プリンツ・ジュラとそのグループである。スーチは屈強な体躯の持ち主であったが、兄弟揃って拷問が加えられた。皮の棍棒とタバコの火を使った拷問だと言われている。拷問が始まって1時間もしないうちに、プリンツが慌てて長官室に来てスーチ兄弟に異変があることを伝えた。事務所に残っていた医師が注射しただけで、問題ないという判断だったという。しかし、それから30分もしないうちに、スーチ兄弟の心臓は完全に止まってしまった。

スーチ兄弟死亡のニュースはすぐにラーコシとソ連顧問団に伝えられた。ラーコシは少し苛ついた様子だったが、それ以後はスーチ兄弟の件に触れることがなかったという。ソ連顧問団もあたかも何もなかったかのように、スーチ兄弟の死亡はそのまま不問のまま片付けられた。

スーチ虐殺の謎

何故、スーチ兄弟が死ななければならなかったのか。誰がその指示を出したのか。ラーコシとソ連顧問団の意思だとすれば、いかなる目的のためだろうか。

一つは、まさに秘密を知り尽くした者を粛清するというスターリンの手法が、ソ連顧問団から受け継がれたことである。

二つは、ピーテル・ガーボルでなく、ソ連の支援があるはずのスーチが標的になったのは、ソ連共産党内の政治的対立がハンガリーの顧問団の判断に影響を与えたためであろう。

スーチ兄弟虐殺の後、共産党トップと政治警察指導者の連続的な逮捕劇が始まった。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)